

日本に於ける宋元版の一考察

黄 華 珍

Wood-block books from the Sung and Yuan dynasties, preserved in Japan

キー・ワード： 宋元時代，印刷術，文化

前書き

周知のように、印刷術は中国の古代四大発明の一つである。その印刷術の中でも木版印刷術は最も早く発明されたものである。これをきっかけに文献の流伝・流布は空前の速度を加え、教育や学術の普及と発達をもたらした。ところが、その印刷術の発明された年代については、諸説があり、今のところ定説がない。現存する実物や古文献の記録によれば、この技術の利用は遅くとも唐の初め頃にはすでに始まっていたと考えられる。現在、唐の印刷物とされる実物を若干見ることができる。その代表的な物としては、韓国慶州の仏国寺釈迦塔から発現された『無垢浄光大陀羅尼經』(690～705年間の印刷物とされる)、唐懿宗咸通九年(868)に印刷された『金剛經』、同乾符四年(877)に印刷された曆書等がある。近年中国の学界では、1974年西安郊外から出土した、唐初の印刷物とされる梵語『陀羅尼經咒』もよく挙げられている¹。

文献の記載によれば、唐以後の五代にも出版事業が展開され、印刷された書物は世に流通販売されたという。これは事実ではあるが、この木版印刷術が盛んに応用され、大量の文献が印刷されることになったのは、やはり宋代以後である。

宋代は出版事業が空前の活況を呈し、大きな成果を見せた。その大きな理由としては、皇帝を始めとする宋の各階級の支配者が、出版事業に熱心であったことが挙げられる。宋王朝成立後間もなく、いまだ全国統一がなされていない宋初に於いて、朝廷が天下の書物を集める政策を執り、献書者には奨励金を支払ったり、時には官位を授けたりといった奨励を行い、古文献の保存及びその出版に大きな力を注いだ。その後も、宋朝歴代の皇帝は出版事業を積極的に支え続けたので、この機運に乗じて、民間の出版社である書坊も段々増えて、遂に官民挙げて出版事業を積極的に行うという局面となった。特に南宋に至りその支配版図が小さくなってからは、出版事業は一段と発展し、凶書を作る工房が全国的範囲で現れた。このよ

うな出版事業ブームの雰囲気の中で、木版印刷術に比べより先進的な活字印刷術が発明されたのである。宋はまさに中国古代の出版事業の黄金時代であった。

なお、元は宋の出版事業を引き継いだ、モンゴル民族の政権であり、中国全土を支配した時間もそれほど長くなく、平和な時期も短かったせいか、彫版印刷されたものは限られ、その規模は宋には及ばない。全体的に言えば、当時印刷された貴重なものはあるにはあっても、原物はそれほど多く残されていない。但し、木活字印刷と色刷りの技術は元の時代に産まれたもので、後世に優れた版本を残した。

中国の古文献の多くは宋代から印刷が開始された。そのため、宋版はそれまで手抄本で流布した古文献の原本に比較的忠実であるとされる。また元版は宋に近い時代に印刷されたので、宋版の覆刻本も多いことから、研究者には元版は宋版と同じく大変重要視されている。しかしながら、宋元以来、すでに長い歳月を経て、戦争や自然災害等も加わり、焼失や逸亡した宋元版が多く、現存するのは極めてわずかである。

本稿は先学の研究をふまえて、日本に於ける宋元版についての諸問題を考察しながら、宋元版の将来された歴史、その現状及び価値を論じてみたい。

一 日本に於ける宋元本の概況

日本に於ける宋元版の研究書と言えば、森立之氏らの『経籍訪古志』、鳥田翰氏の『古文旧書考』、楊守敬氏の『日本訪書志』、董康氏の『書舶庸談』、長沢規矩也氏の『長沢規矩也著作集第三卷 宋元版の研究』、阿部隆一氏の『阿部隆一遺稿集 宋元版篇』等があるが、これらはいずれも重要な参考資料である。特に長沢氏と阿部氏の大著には、宋元版の調査資料が多く記録されているので、今日でも参考にしなければならない基本資料であると思われる。

さて、日本には中国の古文献が多く存在していることは、周知の事実である。宋人の詩『君倚日本刀歌』³では「徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存」(徐福の行く時書未だ焚かれず、逸書百篇今尚存す。)と詠われている。この詩によっても日本と中国との文献交流が古くから存在しているということを、宋人はよく知っていたという証拠の一つになる。

このような噂の域を出ない情報を頼りに海を渡って日本に逸書を求めてきた中国人がいる。すでに五代の頃呉越国王銭俶が日本に使者を派遣した⁴という言い伝えもあるが、世によく知られた人物としては、1880年日本にやってきた清人の楊守敬である。楊氏は日本にいた四年間に、多くの書物を購入・調査し、帰国後その成果を『日本訪書志』という本に著した。それに取められたものは楊氏が日本で実際に見た貴重な書物の一部に過ぎなかったが、日本に中国の逸書が多いということが始めて紹介されたので、中国の知識人に深い印象を与える名作となった。その後、『書舶庸談』を著した董康氏のように、楊氏の影響を受けて、書物を求めて来日する中国人が増えていった。中国の人々にとって、楊氏らの論文や著作は皆

日本に於ける漢籍に関する貴重且つ基本的な情報源であった。

本稿で議論の中心として扱われる日本に於ける宋元版は、長沢氏の資料に基づいて数えれば、日本に蔵される宋元版は約500部ぐらいある。勿論、これは相当以前の調査であり、元東方文化学院に蔵された宋元版が東京大学東洋文化研究所に転入されるなど、一部書物の事情には多少の変更はあるが、今日に至るも、それは日本に於ける宋元版の基本的数字であると思われる。

近年、宋元版に関する専門書が相継いで出版されたことにより、利用・参考できる資料が以前より多くなった。その例として、1992年に出版された『静嘉堂文庫宋元版図録』、1993年に出版された『宋元版禅籍の研究』、1997年に出版された『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選』⁶などが挙げられる。

『静嘉堂文庫宋元版図録』は、文字資料を記載しただけでなく、書影も付されているので、その原物を直接閲覧するチャンスに恵まれないものにとって、該当の書物にふれられる好機を作ってくれたと言えよう。この図録によれば、静嘉堂文庫には宋版123部（金版を含む）、元版130部が現存している。また、図録には「昭和五年刊『静嘉堂文庫漢籍分類目録』では宋・元版として著録され、その後の調査により明刊本と認定した図書は、当然ながら本図録から省いた。」という断り書きが付けられているので、上記の数字は一番新しいと考えて間違えない。因みに、その省かれた明刊本は32点に及んでいた（その詳細は原書を参照されたい）が、公表された資料によれば、明版と判断されていたものが、再三検討された結果、実は元版であったと改めて判断されたものもある。この辺は、書物出版年代の判断の難しさと同時に、静嘉堂文庫の関係者が極めて厳格な科学的態度で調査したことを窺わせる。書物自体に年代が明示されていない場合、その書式・欠筆字・刻工・字体・蔵書印などの複雑な状況を勘案して判断されるが、その判断が間違っていた例は古今少くない。研究や調査を進めていく中で、修訂が当然必要になって来るのである。

『宋元版禅籍の研究』と『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選』は、いずれも立派な書物である。前者は、多くの宋元版禅籍に関する資料が収められ、大変特色を持つ。後者は、宋版6部（「宋末元初」というふうに判断されたものは3点を含む）、元版7部の資料が収められている。

なお、昨年（1999）10月19日～11月7日奈良で天理図書館の開館69周年記念展「宋元版」（今年5月14日～6月10日は東京で）が開催され、宋版25点、元版18点及び金版と西夏版2点ずつが出展された。それは、宋元版の美しさや魅力を、読者が自らの目で確かめるまたとないチャンスであったと言えよう。

上記した静嘉堂文庫・天理図書館のほかに、宋元版が多く蔵される場所として、宮内庁書陵部・内閣文庫などが挙げられ、また個人の手元に分散されたものもある。その詳細は、ここでは略するが、全体的に言えば、日本に於ける宋元版は大変豊富で、注目されるものが

多い。またその中に、日本政府から国宝や重要文化財と認定されたものも少なくないが、一部の宋元版は天下孤本であり、特別に扱われるのも当然である。

原産地の中国でさえも逸書となったもの、或いは同版を持たない例を次に挙げてみよう。但し、その議論は後文に譲る。

〔宋版の例〕

1, 『太平寰宇記』 2, 『魏氏家藏方』 3, 『楊氏家伝方』 4, 『景文公文集』 5, 『王文公文集』 6, 『誠齋先生南海集』 7, 『誠齋集』 8, 『全芳備祖』(以上宮内庁書陵部) 9, 『重校証活人書』 10, 『外台秘要方』 11, 『周益文忠公集』 12, 『歐公本末』 13, 『王右丞文集』 14, 『新雕名公紀述老蘇先生事实』 15, 『南華真経注疏』 16, 『李太白文集』(以上静嘉堂文庫) 17, 『劉夢得文集』 18, 『豫章黄先生文集』 19, 『莊子音義』(以上天理図書館) 20, 『増広司馬温公全集』 21, 『穎濱先生大全文集』 22, 『平齋文集』 23, 『史略』(以上内閣文庫) 24, 『廬山記』(成篋文庫, 内閣文庫) 25, 『太平御覧』(宮内庁書陵部・静嘉堂文庫・東福寺) 26, 『歴代地理指掌図』(東洋文庫) 27, 『太平聖恵方』(蓬左文庫) 28, 『備急総効方』(杏雨書屋) 29, 『姓解』(国会図書館) 30, 『齊民要術』(高山寺) 等。

〔元版の例〕

1, 『書集伝纂疏』 2, 『金台集』 3, 『道德経註』(以上静嘉堂文庫) 4, 『周易本義附録集註』 5, 『孟子集註』(以上宮内庁書陵部) 6, 『中原音韻』 7, 『歴代君臣図録』(以上杏雨書屋) 8, 『周易本義啓蒙翼伝』 9, 『大宋重修広韻』(以上内閣文庫) 10, 『晦庵先生校正周易繫辭精義』(尊経閣文庫) 等。

二 宋元の出版事業及び当時の中日交流

日本に於いて宋元版が多く存在していること、及びそれに関する諸問題をより深く議論するため、宋元時代の出版事情及び当時の中日関係の歴史を思い出してみる必要がある。

宋(北宋960~1126年・南宋1127~1279年)は、中国の歴代王朝に比べ、その国力は大変弱いものであったが、反面、文化事業では大きな発展を遂げた。出版事業の隆盛は、まさにその文化事業発達の際立った特徴の一つと言えよう。では、その宋代の数百年間に、一体どれぐらいの書物が彫版印刷されたのか、これはなかなか興味深い問題であるが、資料不足のため、判断しにくい問題でもある。明王弇州『朝野異聞録』に、明の奸臣嚴嵩の家宅が捜査された際、六千八百五十三部の宋版が見付け出されたという記載がある。これにより、宋では数万点の書物が彫版印刷されたことになるであろう、と張秀民氏は推測している⁶。

元王朝(1279~1368年)は、言うまでもなく漢民族の政権ではない。その版図は大変広が

ったが、強い軍隊を持ち絶えず戦争を行ったために、経済力は大変脆弱で、それが庶民生活や文化事業の発展に大きなマイナスの影響を及ぼした。そのイメージは宋と正反対で、軍事力が強かった反面、文化事業には見るべきものが比較的少ない。そして、知識人の反政府活動を防ぐため、書物の出版に対して事前の許可を必要とするなどの制限を加えていた。そのせいか、新しい著作は少く、当然彫刻出版されたものの数も限られ、反面宋版の覆刻が多いという結果をもたらした。とは言え、全体から見れば、元は宋の技術や伝統を受け続いだ出版事業が行われ、その点数は多くはないが、優れた元版も世に残されている。

さて、現在中国を中心に世界に現存する宋版は約千点、元版は約六、七百点と推測されているが、日本はそれを比較的多く蔵している国の一つである。これは一体どういうことだろうか。

中日両国の交渉・交流の悠久さは、古文献の記録だけではなく、古代日本が漢・魏から頂戴した「漢委奴国王」印・「神獸鏡」などの実物の発見により証明され、また、隋・唐時代に於ける遣隋使・遣唐使の存在も人々の常識である。この歴史的事実を念頭に入れば、宋元版が日本に多く存在していることをよく理解できるし、それに関する諸問題をもより高い次元で考察できる。両国には長い交渉・交流があったため、日本は中国文化を受容しつつも日本独特の文化を育成しつつあり、この固い基礎のもと、宋元時代に中日政府間の関係が持たれなくとも、民間レベルの交流は絶えることなく継続され、日本国内のニーズに応じて、宋元版が僧侶や商人の手で陸続と日本に将来されたのである。参考のために、ここではまず宋元時代の中日関係の主な歩み⁷を簡略に記す。

- 960年 宋の立国。
- 979年 宋による中国全土の統一。
- 983年 奄然入宋、986年に帰国。
- 987年 宋の商人朱仁聡来日。
- 1044年 宋の商人張守隆らが但馬に漂着。
- 1072年 成尋入宋、1081年宋にて死去。
- 1075年 宋神宗が成尋の弟子に託し経論・錦などを贈る。
- 1077年 日本が宋皇帝に返書・信物を送る。
- 1078年 宋商孫忠が宋の牒状を携え大宰府に來着。
- 1082年 日本が孫忠に宋への返牒を交付。
- 1116年 宋より牒状届く。
- 1117年 宋より牒状届く。
- 1118年 宋より牒状届く。
- 1123年 鎌倉時代の僧道元（1200—1253）が入宋、1127年帰国。
- 1133年 宋の商船來着、平忠盛院宣と称してその貨物を収む。

- 1168年 臨濟宗の開祖栄西（1141—1215）渡宋，当年帰国。前年入宋の重源（1121—1206）は帰国，重源は三度入宋。
- 1172年 宋の明州の使者法皇・清盛に献上品を贈る。
- 1179年 清盛が宋版『太平御覧』を東宮に献上。
- 1187年 栄西二度目の渡宋，1191年帰国。
- 1199年 俊苧（1166—1227）入宋。1211年帰国，典籍二千余巻を将来。
- 1214年 法忍浄業入宋，1228年帰国。後京都戒光寺の開山となった。
- 1216年 將軍源実朝渡宋を企て宋の仏工陳和卿を引見，大船を作る。
- 1235年 円爾辨円入宋，1241年帰国。数千巻の典籍を将来。1255年東福寺の開山となった。
- 1246年 宋僧蘭溪道隆（1213—1278）來日，北条時頼の依頼を受け鎌倉建長寺を開山。
- 1254年 幕府宋船の入港を年五隻に制限。
- 1260年 宋僧兀庵普寧來日，後北条時頼の招請により，鎌倉建長寺に入る。1265年帰国。
- 1268年 高麗使潘阜蒙古皇帝フビライの書を携え太宰府に来着。幕府の朝議で返牒をせぬことに決定。
- 1269年 蒙古使対馬に来着。
同年，宋僧大休正念來日，1288年禅心寺にて死去。
- 1271年 蒙古国号を元と称す。
同年，元使趙良弼国書を携え太宰府に来着。上京を拒否。
- 1273年 元使趙良弼再び太宰府に来るも上京を拒否。
- 1274年 元・高麗連合軍九州に上陸，大風雨のため退く。
- 1275年 元宣諭使長門に来着。幕府はこれを鎌倉に召喚して斬る。
- 1278年 元日本商船の交易を許可。
- 1279年 南宋滅びる。
同年，元使周福筑紫に来着。幕府はこれを博多で斬る。
同年，南宋禅僧の無学祖元（1236—1286），北条時宗の招請により來日。1282年円覚寺を開創。
- 1281年 元の東路軍・江南軍14万人，九州北部に來襲。暴風のため撤退。
- 1284年 元使対馬に来着。
- 1299年 元が普陀山の名僧一寧を遣わし和交を求む。一寧が1317年日本にて死去。
- 1305年 一寧の弟子である日僧龍山徳見入元，四十五年後帰国。
- 1306年 日本商船元の慶元（寧波）に赴き交易。
- 1307年 日僧雪村友梅（1290—1346）入元，1329年帰国。
- 1318年 多数の日僧入元。
- 1326年 臨濟宗の名僧清拙正澄（1274—1339）渡日，後開善寺の開山となった。1339年日

本にて死去。

1327年 日僧邵元（1294—1364）入元，二十年後帰国。

1329年 元僧明極楚俊・竺仙梵仙来日。前者は建長寺・南禅寺・建仁寺等に，後者は浄妙寺・浄智寺・南禅寺等に相ついで在住した。

1368年 元滅亡。

同年，五山文学の代表者の一人で最高の詩僧である絶海中津が入明。1378年帰国。

以上の資料をまとめて言えば，宋代には以前の遣隋使・遣唐使のような形の交流は存在していなかったし，元代には，中日の間に多くの不祥事が発生した。このような隋唐時代と異った環境の時代に，両国の交流を支えてきたのは，仏教の僧侶や商人などを中心とした民間人であった。文献によれば，宋版の将来はほぼ宋の創立の最初段階から始まり，その役目を果たしたのは入宋僧の奮然らであった。

以上に記した簡表は両国の交流の極一部にしか過ぎず，中日両国の文献の記録によれば，このような交渉・交流は相当数に登り，一例を挙げれば，宋代に両国を往来した商人は延べ数百人にも達したとされる。この点から見ても，宋元時代の中日間の交渉・交流の規模及びその形が窺われる。

三 宋元版の伝来のルートについて

二でも述べたように，宋元時代に僧侶や商人の往来が盛んに行われたので，書物の交流も当然のように盛んであった。但し，日本に於ける宋元版の実物を見れば，これら全部が同一時期に将来されたものではなく，出版された時代に将来されたものもあれば，後の時代に将来されたものもあるということが分かる。各種の資料の記載によれば，宋元版の伝来は大まかに次の三つのルートがあったと思われる。

その一は，古来中国から日本に直接将来されたもの。

『宋史』『日本伝』⁸に次のような記録が見られる。

「雍熙元年，日本国僧奮然与其徒五六人浮海而至，献铜器十余事，並本国『職員令』、『王年代紀』各一卷。……奮然善隸書，而不通華言，問其風土，但書以対云：“国中有『五経』書及佛経，『白居易集』七十卷，並得自中国。……”太宗召見奮然，存撫之甚厚，賜紫衣，館于太平興国寺。……其国多有中国典籍，奮然之来，復得『孝経』一卷，越王『孝経新義』第十五卷，皆金縷紅羅標，水晶為軸。『孝経』即鄭氏注者。越王者，乃唐太宗子越王貞。『新義』者，記室參軍任希古等撰也。奮然復求詣五台，許之，令所過統食。又求印本『大藏経』，詔亦給之。二年，随台州寧海県商人鄭仁徳船帰其国。……」

ここで記録されたのは，奮然が宋初に於いて入宋した事実であるが，我々はより多くの情報を読み取ることができる。奮然は入宋後，当時の宋皇帝に拝謁し，手厚いもてなしを受け

た。更に『大藏經』を求め、詔によりそれを頂戴した。裔然は、当時日本では中国の典籍『五經』、仏經、『白居易集』七十卷があり、しかもそれらは中国から得ていたという事情を宋人に伝えた。言うまでもなく、これは宋以前の中日間の交渉・交流の結果である。また、裔然はそれまで中国ではすでに逸した鄭氏注『孝經』及び日本人の書物『職員令』、『王年代紀』を持参した。これは、この段階に於いて日本文化自体が次第に成熟の段階に入り、以前の単純な漢籍の将来から、漢籍の生産も可能な時期に轉換したと推測することができる。

裔然は入宋僧の先駆者として非常に有名であり、彼の入宋行動は宋日関係の一里塚であると言っても過言ではない。その後、多くの日僧が相次いで渡宋したが、文献には、その内の何名かが記録されている。例えば、『宋史』には喜（嘉）因・勝木吉・寂照等の名が見られる。彼らも、裔然と同じく数多くの書物を日本に持ち帰ったと考えられる。前文に記した入宋僧の俊苐は、宋に十数年間滞在し、帰国の際二千余卷の典籍を日本に持ち帰った。なお、『劉夢得文集』と『尚書正義』とは、京都建仁寺の千光国師榮西と称名寺の僧圓種がそれぞれ宋より持ち帰ったものとされる。

元代の中日関係については、当然『元史』には記録があり、簡表に見られるように、元の支配者は日本への侵攻を考え、数回に亘ってこれを企てたが、何れも失敗した。それにも拘わらず、僧侶や商人の往来は宋代と同じように続けられた。日本に舶載せられた元版としては、静嘉堂文庫に蔵される、元人陰時夫が編集、陰中夫が註した『新增説文韻府群玉』などが挙げられる。

以上を纏めれば、宋元時代を通し、頻繁に行われた交流活動により、多くの中国典籍が日本に将来されていた。但し、この時代に将来された宋元版の原物が今日まで全部保存されているとは限らないのは当然である。

その二は、朝鮮半島から日本に将来されたもの。

中国の典籍が最初に日本に伝来されたのは、中国からではなく、朝鮮半島からであったことはよく知られている。王仁が『論語』や『千字文』を日本に持ってきたという伝説は、正にその歴史事実の反映ではないかと考えられる。それは朝鮮半島の地理的な条件や当時の日朝関係と繋がっている。宋元時代はそれ以前程ではないが、中国の典籍は朝鮮半島から将来されるケースが依然として存在していた。その実物として、現在、国会図書館蔵『姓解』、成篋文庫蔵『新雕入篆説文正字』と『中説』、宮内庁書陵部蔵『通典』、尊経閣蔵『重広会史』等が挙げられる。『姓解』に見られる「経筵」及び「高麗国十四葉辛巳歳／蔵書大宋建中靖國／元年大遼乾統元年」の印記はその伝来経路の有力な証明となる。

その三は、甬宋楼の旧蔵から購入したもの。

甬宋楼とは、浙江陸心源の蔵書楼であり、多くの宋元版が蔵されていることで世に知られる。現在その旧蔵の多くは静嘉堂文庫の蔵書の重要な部分を占めている。静嘉堂文庫と甬宋楼との購入契約の成立は清末（光緒三十三年、紀元1907年）であり、当時の甬宋楼の後継者

陸樹藩の個人名義で売ったものであるが、これほど多くの貴重書を一回で外国に売却したことは、中国文化史上空前絶後の大事件であり、今日に至っても多くの中国人に忘れ難い出来事であった。この事件の詳細について、米山寅太郎静嘉堂文庫長は「静嘉堂文庫の沿革」⁹に次のように述べている。

〔(明治四十年)六月 清国, 陸心源遺書 漢籍四一七二部 四三九九六冊

陸心源(一八三四—一九四)は、帰安(浙江省呉興県)の人。字は剛甫, 存齋と号した。武人として咸豊・同治の間, 江南・閩粵の群盗を討伐して武功を挙げたが, その面目はむしろ珍籍稀書の蒐集にあり, 楊紹和の海源閣, 瞿鏞の鉄琴銅劍樓, 丁丙の八千卷樓と並んで清朝末期における四大蔵書家の一人として知られ, 殊に宋・元時代の旧刻の富をもって世に鳴った。その書籍は, 先ず書室を二つに分け, 宋元の旧刻をまとめて皕宋樓(宋版二百種を蔵する意)に, 明以後の珍本と名家の手校本・手抄本を十萬卷樓に秘蔵し, 別に潜園に守先閣を設けてその他の通行本を収め, 学者の来読に供した。宋版二百種をもって室に題したのは, いささか誇張の嫌いもあるが, もと先輩の黄丕烈が百宋一廬と称したのに対してその富を誇ったもので, 宋・金・元版を合して二三〇部, 五〇〇〇冊を越えるのを見れば, 心源の誇負が必ずしも過大でないことを知り得る。心源は夙に許鄭の学を慕い, また顧炎武(号は亭林)の書を喜び, その堂に題して儀顧といった。儀顧堂文集・同題跋・皕宋樓蔵書志など著述凡そ六百三十卷に及び, 潜園総集に収める。

陸心源は光緒二十年(明治二十七年)に没したが, その子の樹藩は遺書の保持に苦しみ, 明治三十八年の暮れから翌三十九年の春の交, 密かに使者をわが国に送って売却を図った。初め宮内省の購収を望んだようであったが成らず, 弥之助の同郷の先輩, 宮内大臣田中光顕伯爵, 文庫長重野博士こもごもこれを弥之助に謀り, 弥之助またその書の貴重有益なのを認めて購収の意を固めた。三十九年三月, 文庫は島田重礼(前掲)の次男で竹添光鴻に師事した書誌学者, 島田翰(名は彦楨)を文庫員に任じ, 清国に派遣した。島田翰は四月十八日蘇州着, 直ちに陸氏遺書の実検に当たった。塵封の余, 散乱狼藉, 蠹魚を飽かしむとは, 翰が記した陸氏書室の当年の状況であった。五月に入り, 翰より相次いで報告書到来, 文庫において皕宋樓蔵書目録の調査を行っている。越えて四十年春, 重野博士訪欧の行あり, 陸樹藩と上海に会して交渉, 契約を結んだ。因みに博士は三月二十三日新橋発, 二十七日午後上海着, 同二十九日朝, 香港に向かったから, 博士と樹藩との会談は二十八日ごろに行われたと思われる。陸心源に四子(樹藩・樹屏・樹声・樹彰)あり, 長男樹藩・次男樹屏は, 上海において商業を営んだというから, 当時既に上海にあり, 重野博士との面談も比較的容易に行われたものかも知れない。五月二日, 文庫職員の小沢隆八と書肆寺田弘が上海に赴いて遺書の点検を行い, 五月二十一日寺田, 二十三日小沢が相次いで帰京した。同月二十七, 九日の両日にわたり, 寺田弘が島田翰の手元にあった陸氏遺書中の秘書若干部冊を文庫に移し, 翌六月, 日本郵船会社の汽船により上海から四萬数千冊を舶載し, かくて陸心源の遺書は高輪

の岩崎邸内に収納せられた。代価は、初め樹藩が五十万元を求めたが逡減し、結局十二万圓であった。』

以上がこの取り引きの大体の経過である。なお、当時の中国人の学者はどのような反応を示したかについては、米山氏はまた次のように述べている。

「この陸氏遺書の舶載は、隠密裡に行なわれ、中国の学界は移動後に初めてその事を知って非常なる衝撃を受けた。心源と同郷の沈杏野はこれを憾みとし、死に臨み遺言して私財をもって呉興通俗図書館を設立させ、若干の陸氏の残本とその他の学者の蔵書とを納めて、秘笈の散亡を将来に警めたといい、陸家の管書人李延适(字は仲殊)は、その楼上に立って「武庚山中、白昼鬼哭す」と嘆じたという。』

もしも当時「隠密裡に行われ」なければ、恐らくこの売却行動は成立しなかっただろうと、我々は上記の証言により想像できる。

近年、この売却について、依然として腹を立てている中国の学者が多いが、新説によれば、日本に売却する前、陸樹藩氏は当時の清の中央政府か地方政府に献上しようと働きかけ、また新しい蔵書用の建物を作ってくれるのであるためのスポンサーを募る旨の声明文も新聞に載せたことがあったが、残念ながら、いずれも実を結ばなかったという¹⁰。清末は中国の国力が最も弱かった時期であり、政治的に腐敗した清王朝は国内外に難問を抱え、文化財の保護等到底手が届かない状態であった。また、陸氏の後人は遺書の文化財という価値に対する認識が不足していて、それが家族の遺産だけではなく、国の貴重な文化財でもあるということをも十分考えていなかったようである。

因みに、1949年以後、中国政府は原則として1911年以前の古い書物を外国へ携出することを禁止している。近年、北京その他の大都会で、古い書物のオークションが年数回行われ、貴重な宋元版も登場する場合があるが、海外持出禁止という規則は撤回されていず、その商品のリストには、その旨を表わす印が付されている。禁止されている範囲は、宋元版だけではなく、一部の明版・清版にも及んでいる。つまり、これらのものは売買することは可能であるが、中国国内に保存して置くのが前提条件である。現在中国では、個人の手元にある貴重な書物(他の文化財をも含む)は私財であるが、同時に国の財産でもあるという意識が次第に強くなっている。従って、現在の場合であれば、上記のような取り引きは成立しなかったであろう。しかし、清末に行われたこの取り引きは歴史的事実である。幸いにして、韻宋樓旧蔵は日本に将来されて以後、静嘉堂文庫に保存され、今日に至るもその完全な姿を我々に見せているのである。

なお、韻宋樓旧蔵の宋元版には、「陸心源」や「歸安陸樹声叔桐父印」等の印鑑が押されている。その詳細については『静嘉堂文庫宋元版図録』等を参照されたい。

日本に於ける宋元版について述べるとなれば、当然韻宋樓旧蔵の問題に触れなければならないが、それらが将来されたことにより、「静嘉堂文庫の名を内外に高からしめ」ることが

出来ただけではなく、日本に蔵される漢籍がより一層豊富になり、宋元版の量も飛躍的に増えたのである。

南宋楼旧蔵から購入したもののほか、明清時代及び近代中日両国の頻繁な人的交流により、将来された宋元版もある。例えば、「李氏『備急総効方』、日人以一万元從北京厥肆購去(李氏著『備急総効方』は、日本人が一万元で北京の琉璃廠の店から購入した。)」という記録¹⁾が見られるが、これはその一例である。なお、一部の宋元版に押されている蔵書印からもこういった情報を読み取れるが、ここではその議論を略す。

四 日本に於ける宋元版の資料的価値について

言うまでもなく、宋元版の実物を通して、その時代の出版事情が読み取れる。書誌学的研究には、その実物の存在自身が最も重要で、その実物無くしては、多くの謎を解明することはできないであろう。

前文に触れた日本の国宝や重要文化財と認定されたものは、その高い価値を持つ標識と考えられる。ここではただ二箇所の蔵書の例を挙げておこう。

1, 天理図書館

『劉夢得文集』・『歐陽文忠公集』は国宝、『毛詩要義』・『後漢書』・『通典』・『搜神秘覽』・『白氏六帖事類集』・『豫章黄先生文集』・『新編醉翁談録』(以上いずれも宋版)は重要文化財、『尚書註疏』(金版)は重要美術品である。

2, 静嘉堂文庫

『白氏六帖事類集』・『周礼』(蜀大字本)・『爾雅疏』・『説文解字』・『廣韻』・『漢書』・『呉書』・『唐書』・『皇朝編年綱目備要』・『歴代故事』・『名公書判清明集』・『外台秘要方』・『錦繡万花谷』・『南華真経注疏』・『李太白文集』・『王右丞文集』・『唐百家詩選』・『三蘇先生文粹』(以上いずれも宋版)は重要文化財である。

その具体的価値は、いくつかの面から考えることができる。まず、年代的に考えれば、宋王朝の創立(960)から元王朝の滅亡(1368)まですでに630年~1000年も過ぎているので、その年代の古さ自体が大変高い文化財的価値を有することになる。次に、数多くの宋元版は大変優れた内容を持ち、たとえ後世の刻本があっても、校勘の価値があり、その文献の内容の変化や優劣などの考証にも不可欠な資料となる。つまり、その内容自体が高い学術的価値を有しているのである。更に、数多くの宋元版、特に宋版の印刷は極めて精美で、字体も大変美麗である。その字体は、当時の有名無名の書家が書き、これまた有名無名の刻工が彫刻したものであるが、これ自体がまた大変優れた書道芸術であり、後人の書道の研究や臨書に極めて重要な資料を提供していると言えるのである。

日本に於ける宋元版の価値を理解するため、ここで若干の例を挙げて具体的に議論してみ

よう。

1, 『歴代地理指掌図』

本書は、現在東洋文庫に蔵される。世に見られる同書の最も古く唯一の南宋版であり、1989年には上海古籍出版社から影印出版されている。記録によれば、1919年、本書は再装幀のために北京に送られたが、その機会を利用して、張宗祥氏により北京図書館に蔵される明刻本と照合された結果、現存する明刻本より優れているという結論が出された。

宋・明両刻本の異同について、主に次の数点が挙げられる。

その一は、宋刻本の図面には重要な記号が付されている。具体的に例を挙げれば、宋刻本の一枚目の「古今華夷区域総要図」にある古地名の上には小さな円が描かれているが、これは古今地名の異同を強調するためのものである。二枚目の「歴代華夷山水名図」にある山の名前の上には小さな点が付されているが、これは行政区名と区別するためである。四十四枚目の「聖朝升改廢置州郡図」にある新しく昇格して府・州・軍となった所には小さな点が付されているが、これは旧称と区別するためである。しかし、以上の宋刻本に見られる小さな円や点は、明刻本には見られない。

その二は、宋刻本に描かれた水系・行政区の境や海水の波紋などはすべて明刻本より優れている。例えば、宋刻本には一枚目の「古今華夷区域総要図」に描かれた河の上流にある各河の水源は互いに繋がらないが、明刻本には三本の河の水源が繋がって描かれている。これは、宋刻本の方が事実と合致しているのである。また、黄河と長江の下流などにある沿海の川筋は、宋刻本の図面には比較的是っきりと描かれているが、明刻本ではそれが明確に描かれていない。宋刻本四十四枚目の「聖朝升改廢置州郡図」に描かれた路の境界線は比較的太く、その路名は“陰文”(白抜き文字)で表示され、非常に明確である。これと比べ、明刻本は明らかに宋刻本に及ばない。

その三は、宋刻本に見られる誤字は明刻本より少ない。つまり、明刻本にある一部の誤字は宋版には存在していない。例えば、一枚目の図に、宋刻本は「潼川」「代」「肅慎」に作り、明刻本はそれを誤って「潼州」「伐」「爾慎」に作る。他にも誤字が多く存在するが、ここで細かく列挙しない。

なお、本書は宋代に数回彫版印刷されたことがある。この東洋文庫版はその最初の版本ではなく、南宋「西川成都府市西俞家」刻本であるが、古い版本としてはこの世には本書しか残されていない。従って、もし本書がなかったら、明刻本に存在している多くの問題点は、恐らく永遠に解明できなかつたであろう。こういう点からも本書は、非常に貴重な資料である。

2, 『太平聖恵方』

本書は、宮内庁書綾部や東京博物館にも残本があるそうだが、ここで述べるのは蓬左文庫に所蔵のもので重要文化財である。本書の半分は宋刻本で、残る半分が宋刻本からの手抄本である。本書は百卷よりなるが、百卷全部が宋刻本という実物はすでに存在しない。蓬左文庫に蔵されるのは、恐らく相当古い時期に将来されたものと思われ、珍しい書物として世に広く知られた貴重な書物である。その実態を把握するため、筆者は全書を調査・閲覧した。その結果、間違いなく、卷五～十、十七、十八、二十五、二十六、三十三、三十四、四十五、四十六、四十九～五十六、五十九～六十四、六十九、七十、七十五～八十四、八十七、八十八、九十一、九十二、九十五、九十六、九十九、一百の各卷は、大変優れた宋刻本であることが確認出来た。

本書は、宋の太宗の命により、太医の王懷仁らより編集された医学書である。全書は1670門に分けられ、それに16834点の処方箋が収められている。先ず脈の診断の方法から始まり、次に薬を使う規則、更に類別によってそれぞれ内科・外科・婦人科・児童科・五官・針灸各科の病因や病理及び処方された薬の適応症を述べている。宋代の淳化三年（992）に完成されたもので、その時代の処方箋の集大成であり、重要な医学文献でもある。但し、内容が龐大過ぎ、一般人にとって大変使いにくく、宋の仁宗慶歴六年（1046）何希彭により整理されて『聖恵選方』が編集された。

中国では、本書の宋刻本は、明の初期にはすでにこの世から消失した。現在、北京大学図書館には同書の宋抄本が二セット蔵されているが、いずれも日本の江戸時代の抄本である。ここからも中日間の図書交流の歴史が窺われる。歴史的に見ても日本人は中国の医学書に大変興味を持ち、初期の段階から将来された医書を手抄して、世に流布していたし、客観的条件が満たされれば、出版する場合もあった。現在、中国ですでに逸したその他の医学書が、日本ではまだ見られるという例もある。本書もその類似のケースであるかも知れないが、恐らく早い時期に将来され、これを祖本として手抄本を数冊作ったのであろう。歳月の経過につれて、その祖本の一部も紛失し、止む得ず手抄本で補って定数を満たしたようである。本書は、他の医学書と異なり、その規模が龐大過ぎ、使いにくいせいも、日本では彫版印刷或いは活字出版されることはなかった。

3, 『劉夢得文集』

劉夢得とは、即ち唐の著名な詩人劉禹錫であり、夢得はその字である。貞元九年（793）の進士で、博学鴻詞科に登り、監察御史を授けられるが、王叔文が指導した永貞革新に加わったため、革新失敗後郎州司馬に左遷されたことがあり、後に集賢殿の学士、太子の賓客に遷り、世に劉賓客と呼ばれるようになった。生涯の著作は豊富で、生前その文集が数点編集されたことがあるが、宋代には四散し完全なものではなくなった。

現存する劉氏の文集で宋刻本は凡そ三種ある。一は、北京図書館所蔵の前四卷の宋刻残本

である。天理図書館所蔵のと同名(『劉夢得文集』)であるが、行数や文字数(毎半葉十二行、毎行二十一字)により別の版本であることが分る。二は、『劉賓客文集』と題する、紹興八年(1138)に董弁より彫版印刷されたもので、この書物は現在台北の故宮博物院に蔵されているようである。近人徐鴻宝(字は宝森)氏と日本株式会社大安よりそれぞれ影印出版されたことがある。三は、日本の「国宝」と認定された、天理大学図書館に蔵される本書である。もとは崇蘭館の旧蔵で、民国の初め頃、『書舶庸談』を著した董康氏により影印出版され、後に『四部叢刊』でもそれにより再び影印出版されたので、遂に通行本となった。

天理図書館の資料によれば、本書の欠筆字は南宋高宗に至り、紹興年間(1131~62)の浙刊本とされる。毎半葉十行、毎行十八字。刻字の書風は端正嚴格、印字も鮮明。中国にも同版の宋刊本は存在しない。京都建仁寺の旧蔵で、同寺開山の千光国師栄西が、入宋帰朝の際、刊行間もない本書を将来したものと言えられる。文集卷三十末にある爵形朱印「天山」は、三代將軍足利義満の蔵書印と言われている。

4, 『姓解』

古文献によれば、中国では始め姓と氏が分かれていた。姓は家族のアイデンティティーの標識であり、氏は姓の下に置かれるが、地位が高い貴族しか持たない称号であった。漢魏以後、姓と氏が合さって一つになった。姓氏と関係する著作の記録は唐宋以来若干見られるが、現在、国会図書館に蔵される本書は、各姓の出处が記されている。中国では、早い時期に逸したものらしく、余り知られていない。宋の邵思の作で、北宋仁宗朝の刊本とされる。朝鮮半島から将来された証拠になる「経筵」「高麗十四葉……」の印記が見られる。『古逸叢書』にその復刻本が収録されている。

5, 『新編醉翁談録』

本書は、現在天理図書館に蔵されており、重要文化財である。実物を見たことはあるが、今のところ詳細な調査の機会に恵まれていない。

長沢規矩也・薄井恭一両氏の大論「新編醉翁談録について」には、“本書には序跋を缺いてゐる。一部二冊、甲至癸の十集に分れ、毎集卷一・二の二卷に分れ、卷頭には「新編醉翁談録卷之一」次行に「廬陵羅燁編」、第三行に「舌耕叙引」とあり、次に「小説引子」の題があり、其下に「演史講経並可通用」と注し、引子の七律で始まって、甲集卷之一は九流(雑家を除き、小説者流を入れる)の源流末流を叙し、小説者流に、演史・合生・舌耕・挑閃の名があるのは、何れも據所があるといひ、小説の原據、分類に及び、甲集卷二から癸集まで、長短の別なく、小説の話の筋を説明してゐる。作者羅燁は宋史には伝がなく四庫にもその著作は入ってゐない。”とある。

天理図書館の資料には、“(本書は)宋代の伝奇、遊戯文章を集めたもので、甲~癸に至る

十集，各集二卷に分かれ全二十卷。「小説開闢」と題して，小説の体を靈怪・煙粉・伝奇・公案・朴刀・捍棒・神仙・妖術に分け，それぞれに属する小説の題名一百余种を揚げた甲集卷一「舌耕叙引」の一章は，初期白話小説研究上貴重な資料といえる。また，甲集卷以降には，「張氏夜奔呂星哥」など，久しく散佚していた宋元の戯文も収録されており，本書によってその筋を知ることができる。刊年については，書中元人の名も見えるが，俗字略字を含んだ字様，さらには版式，本文の内容等から宋末元初の建刊本と考えられる。他に伝本のあるを知らない天下の孤本で，仙台伊達家観瀾閣旧蔵。”とある。

本書は，天下の孤本で，大変貴重な版本である。なお，作者羅燁については，現在に至るもその詳細は不明である。

6. 『尚書正義』

本書は，現在宮内庁書陵部に蔵されている。唐孔穎達らに撰された中国最古の文献の一つの『尚書』に関係する文集である。貞観の時(627-649)，孔氏は顔師古，司馬才章，王恭，王琰らと命を受け，『尚書』の義・訓百篇余りを撰し“義賛”と称したが，詔により“正義”と改めた。本書は，『孔伝古文尚書』を底本とし，六朝後期以来の費彪，蔡大宝，巢猗，顧彪，劉焯，劉炫ら諸家の“義疏”を採録し，総合的に展開させたものである。高宗永徽の時(650-655)，更に于志寧らにより添削され，定着して世に流布された。最も価値を有するのは，漢の当時すでに逸した今文『尚書』の二十八篇が，本書に保存されていることである。これは中国古代史の研究にとって大変重要な資料である。

每半葉十五行，每行二十四字。長沢氏の記録によれば，“本書は金沢の旧蔵にして，卷三・四・六・十二に，嘉元元・一年中，称名寺の僧圓種の手跋あり。或は圓種が宋より賚したるか云ふ。後称名寺より流出し，鎌倉圓覚寺塔中帰源院の有に帰し，卷一は戸塚野宿の賈人伊勢屋源七の許に在りしを，多紀元簡の手にて幕府に入り，以て今日に及ぶと。卷中副葉に「帰源」の墨印あり。”という。

因みに，北京図書館には宋両浙東路茶塩司刻本『尚書正義』が蔵されている。每半葉八行，每行十九字。卷七～八，十九～二十は日本の抄本で補なわれており，楊守敬の跋がある。これは楊氏が大阪にて購入したもので，足利学校遺蹟図書館所蔵のと同版である。

7. 『論語註疏』

本書は，宮内庁書陵部に蔵されている。言うまでもなく『論語』は儒家の主な經典であり，漢以来その注釈書は多数存在する。本書は，魏の何晏『論語集解』と宋の邢昺『論語註疏』との合併と考えられる。同書の通行本は『論語註疏解経』二十卷に作る。

本書は，光宗・寧宗間の蜀刊本とされ，金沢文庫旧蔵。「顧氏／定齋／蔵書」「定齋」「樵李／顧然／離叔」「読書精舎」等の蔵印がある。1929年中華学芸社・1930年渋沢栄一氏から影印

出版されている。北京図書館には、元刻明修本と明刻本があるだけである。

長沢氏は「本書は通行本を校するに、通行本には誤脱臆改頗る多きを知る。「堯曰篇」の如き、特に甚だしきものあり。故に本書は、但に古刻本として尚ぶべきのみならず、内容亦貴重視すべきものとす。」と指摘し、阿部氏は「論語正義現存本中の最古最善本と称し得る。」と指摘している。

8, 『毛詩要義』

本書は、現在天理図書館に蔵されており、重要文化財である。

毛詩とは、漢代の毛亨が伝えた「五経」の一つの『詩』である。本書はその注釈書で、南宋魏了翁（1178-1237）が左遷されて靖州にあった際に著した「九経要義」（儀礼・周礼・礼記・周易・書・詩・春秋・論語・孟子）の一つである。本書は、魏氏の没後その子克愚が淳佑十二年（1252）、徽州（安徽省歙県）にて上梓したいわゆる郡齋刊本であるとされる。

本書は、清人曹寅・胡惠墉・郁松年らの蔵書印や手識があり、日本に将来された年代はそれほど古くはない。天理図書館の資料に指摘されたように、本書は「刊行後二十四年の景炎元年（1276）、版木を収蔵していた紫陽書院が兵火に遭った為に、他に同版の伝存を聞かない天下の孤本である。」

9, 『通典』

本書は、現在宮内庁書陵部所蔵の北宋版と天理図書館所蔵の南宋版がある。

唐杜佑より編纂されたが、唐劉秩の『政典』を踏まえて、三十年余りの時間を費やして、ようやく貞元十七年（801）に完成された名著である。全書二百巻。

本書に記録されているのは、上古から唐の天宝の末までのことであるが、注では唐肅宗・代宗の時代まで言及されている。全書は、食貨・選挙・職官・礼・楽・刑（兵を含む）・州郡・辺防の八典に分けられ、典の下に子目があり、千五百余りの事項が記録されている。その内容は約二百点以上の典籍から引用され、その中には逸書が頗る多く極めて貴重な資料で、特に歴代諸制度の変化の沿革についての記録は大変詳細で确实である。中でも唐代に関する資料の価値は高く、特に食貨・職官・州郡・辺防などの典に記録されたものは詳細である。本書には、誤った記録や書き漏らしている事実も多少あるが、独特で優れた見解を披瀝している部分が多い。なお、儀式や制度を記録するような文化専門史の編纂は、本書の作者の独創であり、食貨というものを各典の巻首に置いているのも独創的で、古来評判が高い。

天理図書館所蔵のは百七十四巻三十六冊が現存する。欠筆字は構（南宋の高宗）に至るが、南宋初年の北宋刊本の覆刻本とされる。宮内庁書陵部所蔵の北宋版が1980-1981年汲古書院から影印出版された。現在、中国では、宋元通修本残巻及び明・清刻本がある。

10, 『重広会史』

本書は、現在尊経閣に蔵されている。北宋中期に編集されたものであるが、編者の名前が書かれていない。

全書は百巻よりなり、主に紀伝体の正史を集めて記録したもの。『史記』から『新唐書』までの十六史(『旧唐書』と『五代史』を含まない)の内容を吸収し、加えて『左伝』や諸子から数十項目を摘録したので、故に“会史”と称される。『冊府元龜』の形を真似て、十六史の最も貴重な内容を類別に集めた目的は、閲覧者や利用者の利便を考えたためであろう。

全書は五百五十三門に分けられ、それが主題により同じ性格の史実が数件ないし数十件集められ、その出典の書名もはっきり注記されている。北宋に成立したものであるから、十六史の通行本との異同が窺われる。

本書は、中国では南宋の頃より姿が消えている。日本に蔵されている本書は朝鮮から将来されたものとされ、天下の孤本である。

以上に述べた¹²のは、日本に於ける宋元版の本の一部分にしか過ぎないが、その一部を通して、全体の価値を理解できよう。なお、天理図書館に蔵される『莊子音義』は、筆者がかつて全面的に調査したことがあり、北京図書館に蔵せられる異った出版元の同書(宋元通修本『經典釈文』卷二十六・七・八)を照合した結果、文字の異同が多く見られた。これにより、陸徳明『莊子音義』の原本の正確な内容を窺うことが出来る。詳細については拙著『莊子音義の研究』など¹³を参照されたい。

五 日本に於ける宋元版の影響について

宋元版は当時の中国の先進的な文化として多くの国々に、特に周辺国である朝鮮・日本に大きな影響を与えた。現在、我々が見る和刻本には宋元版そっくりなものがあり、これはその影響の物証になろう。勿論、影響は形だけではなく、内容にも及んでいることは当然である。

前述したように、日本に於ける宋元版には経・史・子・集の各部を見る事が出来、従ってその影響も極めて多面的である。ここでは宋代理学が日本に広められた例を挙げておこう。

この問題について『中外哲学交流史』¹⁴では、次のように述べられている。

「宋儒はいつ頃日本に伝来されたかについては、学界でも異論はあるが、一般的には十三世紀に於ける中日禅僧の交流がその濫觴と考えられている。

日僧俊芿は1199年に入宋し、13年間滞在中、禅・律・天台の教義を習うと同時に、当時の優秀博学な儒者とよく交わった。1211年帰国に際しては大量の仏經のほか、儒・道に関する書籍256巻も携行した。……僧の円爾辨円は1235～1241年中国に留学し、その『三教典籍目

録』に持ち帰った宋代理学の著作を記録した。彼はまた当時の幕府の執権北条時頼のために『大明録』の講義を行い、系統的に二程と朱熹の理学思想を紹介し、経書を学ぶ席で宋学を講義する風を始めて開き、日本での宋儒を宣伝する第一人者と呼ばれた。当時中国からやってきた一群の“帰化僧”も力を入れて宋儒を宣伝した。例えば、日本仏教史に於ける鎌倉禅宗道場を創立した帰化僧の蘭溪道隆は、よく宋儒の哲理によって仏教の宗旨を述べた。そのため、ある意味で言えば、その禅宗の道場は即ち宋学を広める場所であった。このほか、兀庵普寧・大休正念・子元祖元及び元政府の命を受けて日本に渡来した一山一寧らは、長年日本に滞在して法を講じ、同時に禅や理学をも講じたため、結果的に儒学の普及を促進させる役割を果たした。」

上述した人物の多くは宋元版の将来と関係がある。彼らが行った宋代理学を広める活動は、多くの宋元版を活用したことが分かる。また宋元版が日本に多く将来されたという事実のほか、次の事実も注意すべきである。それは出版技術を持つ宋元の刻工が日本にやってきて、彫版印刷の仕事に加わったことである。特に元代になってからは、その人数が多くなった。この件については、張秀民『中国印刷史』¹⁵が次のように述べている。

「中国の和尚は仏法を宣伝するために日本にやってきて、日本人に仏書を彫版印刷することを勧めただけではなく、また自分の著作も刊行した。宋末の禅僧正念（号は大休）は寧波の天童山を離れ、日本の関東地方にやってきて、相次いで三箇所の住持を担当した。後、自著の『仏源禅師語録』を自ら整理し、弘安七年（1284年）刻工に命じてこれを出版した。中国の和尚は資金を出して本を出版するだけでなく、一部の人は自ら文字を書き、それを刊行させた。大休は書物を彫版印刷した同年、宋了一は十余卷の『法華三大部』を書き写し、それに注疏を施した。同書にはまた「大宋人廬四郎書」という文字が見られるが、これにより宋の僧侶と庶民は何れもこの書物の文字を書き写す作業に加わったことが分かるのである。」

「元代の社会では文化が重要視されていなかったため、出版される書籍は比較的少なかった。そこで、浙江・福建あたりの刻工たちは、故郷を遠く離れ、海を渡って日本へ生計の道を求めて来た。ちょうどその頃、日本の寺では仏経と高僧の語録を大いに翻刻していたところなので、彼らは優れた技を振るうチャンスに恵まれた。現在、その刻工姓名が考証できるのは約五十人以上（一部は姓か名のどちらかしか残されていない）いる。

元初の頃日本に行ったのは、四明の徐汝舟と洪拳であり、日本の正応二年（元の至元二十六年、1289年）彼らが『雪竇明覚大師語録』を刊行し、洪拳はまた『祖英集』を刊行した。元末日本に行ったのは、福州の南台橋出身の陳孟千、陳伯寿である。孟千は詩作の出来る珍しい刻工である。後者は“大唐陳伯寿”と自称し、日本人も彼を“唐人刮字工”と呼んだ。このほか、天台周浩、福唐（福清）蔡行、大唐江南、陳仲、陳堯、王榮、李褒、鄭才、曹安、邵文、陶秀、錢良、陳孟榮らがいる。……[『禅林類聚』は]日本貞治六年（元至正二十七年、1367年）に〔陳孟榮〕より刊行されたもので、〔孟榮妙刀〕と自称する程、その技は精巧で美し

いものである。……」

このように渡来人の存在は、確かに日本の出版事業に積極的な影響を与えてきた。彼らが彫版印刷の仕事に直接加わっただけではなく、日本の技術者をも養成したため、宋元時代が終わってもその影響は引き続き存在していた。ここで宋元版により覆刻された若干の書物の例¹⁶を挙げてみよう。

- 1, 『重編詳備碎金』(覆南宋臨安趙宅書籍舖刊本) 日本南北朝刊
- 2, 『春秋経伝集解』(覆宋嘉定興国軍学刻本) 日本南北朝刊
- 3, 『義楚六帖』(覆宋崇寧間福州開元寺刻本) 日本延宝三年(1675)刊
- 4, 『禅林僧宝伝』(覆宋宝慶刻本) 日本室町初期刊
- 5, 『雲門匡眞禅師広録』(覆宋福州鼓山王溢刻本) 日本室町時代刊
- 6, 『雪峰空和尚外集』(覆宋淳熙刻本) 日本室町初期刊
- 7, 『大慧普覚禅師宗門武庫』(覆宋淳熙刻本) 日本室町時代刊
- 8, 『春秋経伝集解』(宋嘉定興国軍学刻本による活字印本) 日本慶長十七年(1612)以前刊
- 9, 『周易注』(宋建陽坊刻重言重意本による活字印本) 日本慶長十年(1605)刊
- 10, 『新彫皇宋事宝(実)類苑』(宋紹興二十三年麻沙本による銅活字印本) 日本元和七年(1621)刊
- 11, 『集千家註分類杜工部詩』(覆元皇慶元年勤有書堂刊本) 日本永和二年(1376)刊
- 12, 『大広益会玉篇』(覆元至正二十六年南山書院刻本) 日本慶長九年(1604)刊
- 13, 『景德伝灯録』(覆元延祐湖州刻本) 日本貞和四年(1348)刊, 延文三年(1358)補修
- 14, 『蔵乘法数』(覆元至正二十年刻本) 日本応永十七年(1410)刊
- 15, 『後漢書注』(元大徳九年寧国路儒学刻本による活字印本) 日本寛永年間刊
- 16, 『標題句解孔子家語』(元泰定元年蒼岩書院刻本による活字印本) 日本慶長四年(1599)刊
- 17, 『韻鏡』(覆宋慶元丁巳重刊本) 日本刊
- 18, 『察病指南』(日本室町時代覆宋淳祐刻本による活字印本) 日本慶長年間刊
- 19, 『無文印』(覆宋咸淳九年刻本) 日本貞享二年(1685)刊
- 20, 『古今韻会挙要』(日本応永五年覆元刻本による活字印本) 日本慶長年間刊

以上の例を見れば、その出版年代はいずれも中国の元またはその後の明・清時代に当たり、ここからも宋元版の長い影響が窺われるのである。

因みに、日本では宋元版の抄本も存在している。正にこのような日本抄本のお陰で、一部の逸した宋刻本の内容が保存し得る。『太平聖恵方』、『楊氏家蔵方』、『魏氏家蔵方』などの医学書はその好例である。

いずれにせよ、宋元版は長い間日本人の文化生活など各方面に大きな影響を与えたことは確かである。

六 余論

上記の考察を通じて、日本に於ける宋元版については、ほぼ全面的な理解ができよう。日本に蔵される宋元版は宋元時代に出版されたものの一部分にしか過ぎないが、各分野の書物が揃っているため、それらを資料として、宋元版に関する諸問題の研究・考察の展開が可能である。例えば、宋版の諱字や元版の簡体字などの特徴は、日本に於けるその実物からほぼ確認できる。

相当以前から、長沢氏や阿部氏ら宋元版研究の先駆者たちは、宋元版を詳細に調査して来た。その上で作り上げた資料（例えば、宋元刻工表など）は、今日に至るも大変重要な資料である。勿論、それは完全と言えないが、宋元版に於ける普遍性を有しているために、どこに蔵される宋元版の研究にとっても参考にする価値のあるものである。

諱字とは、敬意を表わすため、父母や当時の皇帝またはその先祖の名前に使われた文字の使用を避ける習慣であり、形として色々あるが、欠筆字を使うのが普通である。宋代では、これを厳しく要求したため、それが宋版の重要な特徴の一つとなっており、これを利用してその書物の彫版印刷年代を判断することが出来る。但し、これには種種複雑な問題が絡むので、判断は慎重を期すべきである。元版では諱字は使われていないといわれているが、一部の宋版の覆刻本は祖本の諱字をそのまま使っているし、一部の著者には異民族の支配に反抗する立場に立って、元代になってからも宋代の諱字をそのまま使っているものもある。元代の支配者に対しては欠筆字は使われないようであるが、「語の元室に洩るもの擡頭に作り、また上部を空格にする」(元版『国朝名臣事略』)、「語、元朝に洩れば上部を空格にする」(元版『陳衆仲文集』)という場合¹⁷もある。勿論、これは敬意を表す標識であるが、欠筆字と違い、年代の判断の根拠にはならない。

簡体字については、宋元版ともに存在している。但し、宋版の場合、時代の進行とともに、段々増えて行き、特に南宋末と元の刻本にはそれがよく見られる。勿論、これは簡体字と言っても、現代中国語の簡体字と全く同じではなく、多くは当時の俗字である。我々にとって困難なのは、一部の坊刻本がむやみに同音字を使い、混乱するケースが多いことである。

大局的に言えば、宋版は確かに優れている。従って、明代中葉からそれが重要視されているのは当然だが、実物を細かく見れば、宋元版にも若干の問題点が存在するのである。実物の調査研究無くして、宋元版ならすべてが優れると考えるべきではない。これについては、古来一部の学者が色々な角度から種種の論証を加えてきた。例えば、明の胡應麟は“今書貴宋本，以無訛字故。……余所見宋本訛者不少（現在，書物と言えば，宋刻本が重要視されているが，間違い文字がないという理由にある。……しかし，私の見るところ宋刻本には間違い文字が少なくない）。”と言い、清の錢大昕は“今人重宋槧本，謂必無差誤，却不盡然（今人は宋刻本を重んじて，必ず誤りが無いと言っているが，実はそうとは限らない）。”と言っ

ている¹⁸。

宋版も他の時代の刻本と同様、一般的に言って、坊刻本より監本(国子監で刊行した書物)の信憑性が高い。それは元々監本を作る目的(標準本を作るということ)と関係があるからである。それに対して、坊刻本は経済活動として作るのが普通である為、いつも厳密に校正されているとは限らない。従って、その信憑性も比較的低い。但し、これらの評価を絶対視する事は危険である。それは、例外も少なからず有り、劣る監本もあれば、優れた坊刻本もあるからである。例えば、監本の宋版『莊子音義』は同書の最も優れた版本とは言い難く、私個人としては、その最も優れた版本は坊刻本の宋版『南華真経』所収『莊子音義』であると考えている。

ここでもう一つの問題を提起したい。それは書物の装幀についてである。中国では書物の装幀は各時代にそれぞれ特有の形式を持っていた。おおよそその流れは以下の通りである。

簡冊→帛書卷子装→紙書巻軸装→経折装→梵夾装→旋風装→蝴蝶装→包背装→線装→(毛装)

宋版の装幀は主に蝴蝶装であったとされ、また通説によれば、線装は明の半ば頃に現れたとされるが、李致忠氏『古書版本鑑定』¹⁹によれば、実際には唐代、五代にすでに線装は現われており、これは古典(例えば、南宋・張邦基『墨莊漫録』)に記載があるだけでなく、唐代、五代、北宋時代の線装本(写本『金剛般若波羅密経』など)の実物(イギリス国家図書館所存)を実際に見ることが出来るという。日本に於ける一部の宋元版は、もとの装幀(巻軸装や蝴蝶装など)のまま保存されているものもあり、中国の書物の装幀の歴史を研究する上で貴重な資料となる。

なお、宋政府は“書禁”という政策²⁰を取ったことがあり、当時一部の書物の周辺国への輸出が禁止されていたが、日本に現存する実物やそれに関する目録を見れば、それは実際には厳しくは実行されていなかったものと考えられる。

結び

以上の検討により、日本に於ける宋元版については次のようにまとめたい。

(一) 日本では、確かに貴重な宋元版が蔵されている。中には、宋元の当時に将来されたものもあり、後年将来されたものもある。また、中国から直接伝来されたものもあると同時に、朝鮮半島を経由して伝来されたものもある。今日では、何れも貴重な資料となっている。

(二) 宋元期間、中日両国には正式な政府間の関係はなかった。しかし、民間レベルの交流は活発に行われ、僧侶や商人などの民間人の交流が盛んだったため、多くの中国の書物が日本にもたらされた。現存の一部の宋元版が当時の盛んな民間交流の物証となる。

(三) 日本に現存する宋元版には、日本の国宝や重要文化財と認定されたものが少なくな

い。実物やそれに関係する資料を見れば、一部の宋元版は原産地の中国でさえすでになく、いわゆる天下孤本となり、大変貴重な資料的価値を持つ。

(四) 宋元版は日本に将来されて、日本の文化に大きな影響を与えた。今日に至るも大量に見られる宋元版の和刻本への覆刻の存在は、当時の日本人がむさぼるように宋元版の内容を吸収しようとした気持ちが窺われる。

注釈

- 1 『中華印刷通史』(印刷工業出版社, 1999年9月), 『唐宋時期的彫版印刷』(文物出版社, 1999年3月), 『中国古代印刷史図冊』(香港城市大学出版社・文物出版社, 1998年)を参照。
- 2 森立之『経籍訪古志』, 島田翰『古文旧書考』, 楊守敬『日本訪書志』, 董康『書舶庸譚』(以上台湾廣文書局影印本), 『長沢規矩也著作集第三卷』(汲古書院, 1983年7月), 『阿部隆一遺稿集第一卷』(汲古書院, 1993年1月)を参照。
- 3 『増広司馬温公全集』(汲古書院, 平成5年8月)を参照。但し, この詩の作者については, 従来異説があり, 今日まで定説がない。
- 4 『楊文公談苑』(上海古籍出版社, 1993年8月), 王勇『中日関係史考』(中央編訳出版社, 1995年1月)を参照。
- 5 『静嘉堂文庫宋元版図録』(汲古書院, 平成4年4月), 椎名弘雄『宋元版禅籍の研究』(大東出版社, 1993年8月), 『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選』(汲古書院, 平成9年2月)を参照。
- 6 張秀民『中国印刷史』(上海人民出版社, 1989年9月)を参照。
- 7 『宋史』(中華書局, 1977年11月), 『元史』(中華書局, 1995年8月), 『中日関係史資料彙編』(中華書局, 1984年9月), 『中国文化史年表』(上海辞書出版社, 1990年11月), 『日本史総合図録』(増補版)(山川出版社, 2000年1月)等を参照。
- 8 前出7『宋史』を参照。
- 9 前出5『静嘉堂文庫宋元版図録』を参照。
- 10 顧志興「湖州頤宋樓藏書流入日本静嘉堂文庫真相考評」(『中国古代藏書樓研究』所収, 中華書局, 1997年7月)
- 11 前出6『中国印刷史』を参照。
- 12 『宋本歴代地理指掌図』(上海古籍出版社, 1989年11月), 『蓬左文庫名品展』(名古屋市博物館, 1980年12月), 『宋元版—中国の出版ルネッサンス—』(天理図書館, 平成11年10月), 前出2『長沢規矩也著作集第三卷』・『阿部隆一遺稿集第一卷』, 尾崎康『正史宋元版の研究』(汲古書院, 昭和64年1月), 『北京図書館古籍善本書目』(書日文献出版社)等を参照。
- 13 拙著『莊子音義の研究』(汲古書院, 平成11年2月), 『日藏宋本莊子音義』(上海古籍出版社, 1996年9月)を参照。
- 14 『中外哲学交流史』(湖南教育出版社, 1998年7月)を参照。
- 15 前出6『中国印刷史』を参照。
- 16 『北京大学図書館藏善本書録』(北京大学出版社, 1998年5月), 前出1『唐宋時期的彫版印刷』を参照。
- 17 前出5『静嘉堂文庫宋元版図録』を参照。

日本に於ける宋元版の一考察

- 18 前出6『中国印刷史』または胡應麟『少室山房筆叢』(中華書局, 1958年10月), 錢大昕『十駕齋養新録』(浙江書局重刻本, 光緒二年)を参照。
- 19 李致忠『古書版本鑑定』(文物出版社, 1998年2月)を参照。
- 20 封思毅「宋代図書政策」(『国立中央図書館館刊』新22巻第1期, 1989年6月)を参照。